

わたしたちの人權

95

だれもが人間として生きていくうえで優待を受けることができない
当然の権利これが「人權」です

子どもたちの人權作文

12月の人權旬間にあわせて、子どもたちが書いた人權作文を1・2月号でご紹介します。今月は2人の作品を紹介します。

自分を好きになるという事

清和中学校 3年 森 晋太郎



今回の人權学習は、「就職に関わる差別」について学習しました。今回の学習を通して、ぼくは人の尊厳は傷つけられてはいけないのだと本当に強く実感しました。昔の就職試験の面接は家族構成、自分の住所、更には父母の状態まで聞かれる内容のものがありました。一人一人違ってこそ人間なのに、まわりと少し違うとすぐに差別、偏見の目で見られるということが象徴されていたものでした。まわりの人からそういう目で見られて、毎日働く会社なんて絶対に嫌です。今は昔と違い、大きく変わりました。統一応募用紙ができ、「言わない、書かない、提出しない」という取り組みなど、人々の差別をなくしていくという努力があったからこそ、今があることを忘れてはいけないと思いました。

ぼくは実の血のつながった家族とはほとんど会えない状態です。祖父と母は亡くなりました。父は今、どこにいるか分かりません。そういうことがあるので中学校に入学して、1、2年生くらいまではまわりの人と自分は違うと思いつつ、「自分はダメ」「自信が持てない」という劣等感を抱いていました。しかし、まわりの人がぼくのことを理解してくれておかげで、そう感じることもなくなってきました。今では、人前で自分の過去の話を話すことに抵抗はほとんどなくなり、なりました。そうしたのはまわりの人のおかげです。だから、友達や先生、家族には感謝していますし、社会に出てもまわりの人に感謝できる人間であり続けたいです。

ぼくは3年前にこの清和にきました。最初は、以前に住んでいた地を離れるという寂しさもありましたし、どんなところだろうという不安もありました。そして新しい人と出会うことへの恐怖もありました。それは、小学生の時にいじめられたからです。それが原因で人を信じるということができなくなりました。だから、去年くらいまでは、何事も自分一人だけでやろうとして、失敗して、一人で落ち込むという日々の

くり返しでした。何度も落ち込んで、暗くなってしまったり、「死にたい」と思ったことも何度もありました。しかし、そんなぼくを変えてくれたのが、友達や先生、そして家族でした。今までは何事も自分一人だけでやろうとして、一人で生きていくこととしていました。が、やっぱりまわりの人たちの支えがあるからこそ、生きていける、一人では生きていけないのだと思いました。

温かい家族や先生、友達に恵まれたことを誇りに思っていて、これからの人生を歩んでいきたいと思っています。だからこそ、今回の学習で学んだことを大事にしていきたいと思っています。自分の責任のないところで、例えばぼくみたいな実の親がいない人が自分の夢をはばまれる差別が未だに存在するかも知れません。そういう差別をなくすために、「言わない、書かない、提出しない」を大切にしていきたいです。そして、自分さえ差別を受けなければいいという考えでは、いつまでたっても差別はなくならないと思います。そして、他人の立場になって考え、自分から差別の現状を知っていくことが大切だと思っています。そして、自身に誇りをもつことで、自分はいろいろな人に支えられ、その中で強く生きていくという決意が必要だと思っています。ぼくも自身に誇りや自信が持てた、自分自身を好きになったことで、ここまで変わる事ができました。自分の殻にいつまでも閉じこもらずに、殻を自分からこじあげようとする姿勢も大事だと思っています。ぼくはこの清和に来ることができて本当に良かったと思っています。

自分と他人の心

矢部高等学校 3年 青木 由希子



「喧嘩するほど仲がいい」という言葉を通じて聞いたことはあるだろう。その通りで、人と人はたくさん接することで自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを理解し仲が深まるものだ。最近、「いじめ」や「自殺」がニュースで話題となっているが、仲を深めるなどというレベルではないと思う。人間は、相手も自分と同じ深い心や考えを持っていることを心に留めるべきだと思う。

そのためには、相手の立場に立って考える想像力を持つことが必要だと思う。小さいときには、道路につぶれて死んだ虫が落ちていたりすると、かわいそうに思ったりしていた。しかし今では、そんな虫には気付かないことが多いだろう。気付いても気持ち悪いと思うことだろう。保育園や小学校では「人の気持ちを考えよう」なんてよく言われたけれど、本当に言われるべき人はむしろ、社会に出た大人たちなのではないだろう

か。確かに年をとればとるほど、自分が背負う社会での責任が多くなり、他人の気持ちを考えてるまで手が回らなくなりがちだと思う。しかし想像力を持って人に接することは、人間関係をよりよくするために、欠かせないはずだ。また、悩んだり、苦しんだりしているのは自分だけではなく、相手も同じように悩める心を持っているということを忘れてはいけない。

私自身、悩んでいた時があった。私は自分の悩みを他人に話したからといって、分かってもらえるはずがないと思っていた。しかし、ある時、作文で身内の不幸について述べているのを聞いて、私だけが悩んでいるのではないと思った。その後、私はある人に打ち明けた。今まで話さなかったことを言うのは、私にとって、とても勇気のいることだったが話し終わったあと、その人に「一人で抱え込まなくていいんだよ」と言われて心が楽になった。

私は、相手の心の内までをも深く想像できる、そんな広い心を持った余裕のある人になりたい。もし自分が悩みを抱えたりして孤独を感じたら、自分の心を人に話してみると良いと思う。自分の心が軽くなり、案外共感してもらえたりもするかもしれない。

人權を考える町民の集い

12月3日、千寿苑で人權を考える町民の集いが開催されました。集いでは、ここで紹介した小・中・高校生による人權作文発表に続き、人權講演会を実施。講演会では大阪教育大学非常勤講師の土田光子さんが、「私を創ったもの、私を再生させた同和教育との出会い」と題して講演を行いました。

中学校教師として在任中は、互いが支え合う家族のような学級づくりを目指して奮闘してきた土田さん。さまざまな家庭環境におかれた子どもたちが集まるクラスで、本当の仲間とは何かを気づかせ、自分たちでやり遂げる力をつけるために、積極的に人權学習に取り組んでこられました。



講演する土田光子さん

土田さんの熱心な取り組みを聞いた参加者からは、「子どもたちは生まれながらに清らかな心を持っている。それを大切に守れるような大人でありたい」、「本当の人權教育とは何か分かったような気がする」といった感想が寄せられました。